



望月久也、ステップス初個展である。望月は1958年東京生まれ、1983年東京学芸大学大学院修了、現在、茨城県石岡市在住である。個展も数多いが、神奈川県相模原野外彫刻展（1984年）、文化庁現代美術選抜展（1991年）、神戸須磨離宮公園現代彫刻展（1994年）と、これまでであった彫刻、特に野外の王道を巡ってきた感がある。それに伴いパブリックワークも日野市、宇部市、新宿区、世田谷区に設置されていることを考慮に入れると、順調に評価されていることが分かる。望月は今回、3mの高さを持つステンレススチールの作品一点、インド白砂岩を用いた可変する作品二点を画廊内に展示した。波の形状の形が反復し、優雅な動きを形成する。作品は素材を変容させることよりも、動作する「状態」に深く関与する印象を与える。それが理解できるようになったのは、重力を無視して視点を漂わせたことに由縁する。彫刻が持つ

重力との格闘を無化し、全く新しい視線を注いだのは私ではない。作品自体である。変換する瞬時の姿がたまたま、写真に止められたに過ぎない。刻々と変化を続ける作品から目を離してはならない。否。目を離し、既存の概念を捨て去り、作品と向き合うと作品が答えてくれる。

